

「行ったら嫌や、行かんといて！」とすがり付い

たら、あるいは、事態は変わるのだろうか、とぼんやりした頭で考えながら、帰り支度をする清の背中に、カツは手当り次第に物を投げ付けていた。

労働で鍛えた清の身体は、カツの投げる座布団やゴミ箱ぐらいが当たってもふらつきもしない。清はそれらを避けもせず防ぎもせず黙々と服を着ると、「じゃあな」と、仏事の後のような暗い声で言うと、背中を丸めて出て行った。

「大変だな、これから。お前が」
「何言ってるんです。今は周りの人が力を貸してくれるから、昔に比べたらやりやすいものよ。介護用品も至れり尽くせりと何でもあるんだから」

「間違っていないよな。俺のしたこと。……清潔に整った中で、きちんと、寝て食べて排泄すること、が何より大切なら、薫の言う通り病院か施設に入れといった方がお袋のためなんだろうけど、……俺、そうじゃないと思うんだよな」

「そうですね。人間はロボットじゃないんだから、行き届いた管理の中に居ることよりも、生きていて良かった、と実感できる状態に居ることの方

(五)

「バアちゃん、お早うございまーす。朝ですよ」
歌うような文恵の声と同時に、雨戸を開け放つ音が聞こえた。

ほんの少し、カツは閉じた瞼の裏に明かりを感じた。耳を澄ますまでもなく、活気に満ちた一日が始まっていることが伺えた。

「顔色が良うなつとるな」すぐ近くで、ボソリと信吾の声が聞こえた。

「ホント！ 温かい表情になってる。病院に居たときより随分良い顔よね？」文恵が言った。
額の髪が生え際を誰かが撫でている。

が意義があるし、幸せだと思っわ。それが、家族と暮らす生活の中にあると言いつけるかどうかは分からないけど……。少なくとも、私は、バアちゃんにそう思ってもらえるようなお世話をした
いと思ってます」

「ああ、お前なら間違いなくそんな世話をしてくれることだろう」とカツは心の中で文恵に言っていた。「しかしねエ、自分の家に居られるのは嬉しいけど、死に損ないの私なんぞの世話を至れり尽くせりしてくれてもちっとも嬉しくないよ。不毛な行為はされても空しいだけさね」と思いがらだが。

文恵は若い頃、信吾と同じ県庁に勤めていた。

信吾しんごの部署ぶしよで、雑用ざつようをしている臨時雇りんじやうといの職員しよくいんだったのだ。

酔よっぱらった信吾しんごを送おくってくれたりしていたので、「彼女かのじよ！」と照てれ臭くさそうに信吾しんごに紹しょう介かいされる前から、カツは見知みしっていた。職場しよばでも何かと面倒めんどうをみてくれていたようだった。御世辞おせじにも美人びじんだとかチャーミングとは言いえぬ三十女さんじゆうおんなだったの
で、よもや信吾しんごと男おとこと女の関係かんけいになろうとはカツは夢ゆめにも思おもわなかったのだが……。

「寛大かんだいというのか見境みさかいがないというのか」
色黒背高いろくろせいたかで、メガネと大きな手が目立めだつ文恵ふみえを家いえに連つれてきて楽たのしげな信吾しんごを見て、峰子みねこはカツにそうつぶやき、「離はなしてくれないわよ。この男おとこを

うように言いった。

「美形びけいの家筋いえすじもこれで終おわりね」峰子みねこがまんざら冗談じようたんとも思おもわれぬ口調くちようでそう言いった。

しかし、文恵ふみえは暮くらしてみると真まことに具合ぐあいのいい女おんなだった。足あしが地ちに着ついた、分ぶんを弁わえた女おんなだった。さしたる花はなもなく、亭主ていしゆよりも六歳ろくさいも年上としうえで三十路みそじの花嫁はなよめという遠慮えんりよからだろう、と思おもっていたのだが、どうやらそれが性分しやうぶんらしい。陽気ようきでよく笑わらう明るい女おんなのだが、することは万ばん事に地味じみで控ひかえ目めだった。そして何なによりカツを喜よろこばせたのは、文恵ふみえが来てから信吾しんごの凍こった心こころが溶とけたことだ。そして文恵ふみえは、そんな信吾しんごよりもなおカツに打ち解うけた。カツは文恵ふみえを嫁よめにしてよか

逃のがしたらもう後あとがないと思おもうから。尤もつとも、あれじや先さきもなかったでしようけどね」と言いった。

それから一年後いちねんご、就職しゆうしよくして三年目さんねんめの秋あき、結婚けつこんしたいと信吾しんごは言いった。

「あんな女おんなを嫁よめにしなくても」という思おもいのあ
るカツは、「つい手てを出だしたら深ふかみに入はいって抜ぬけられなくなったから、というんだったら、母かあさん手てを貸かすよ。結婚けつこんは将来しやうらいに繋つながっているんだから、過あやまちを正せい当とう化する為ためにするんじや墓穴ぼけつを掘ほるだけだからね」と言いった。

「何なんでそんなこと言いうの？」と、信吾しんごは不機嫌ふきげんな顔かおで聞きいて、「好きすきだから、ずーっと一いっ緒しよに居いたいからするんだよ」決きまっているじやないか、とい

つたと喜よろこんだ。

しかし、カツの心こころにわだかまりが生しやうじるのは早はやかった。

翌年よくとし子供こどもを産うむと、文恵ふみえはさつさと仕事しごとを止やめたのだ。

「子供こどもぐらい私わたしが見みてやるのに」とカツがいくらい言いっても、「いいんです。自分じぶんで育そだてたいんです」と言いって、それつきり仕事しごとに行いかず、三年毎さんねんごとに子供こどもを産うんだ。いとど器量きりようの良よくない文恵ふみえが家いえに閉とじ籠こもったのだから容色ようしよくは増ますます衰おとろえた。しかし、ま、文恵ふみえはどうなるうとかまわないのだが、一人ひとりで家族かぞくを養やしなわなければならなくなった信吾しんごが目めに見みえて世帯せたいやつれをしていくのが、カツに

は堪えられなかつた。結婚して十年もすると、
信吾には、青年の頃の精悍な面影はどこにもなかつた。仕事から帰って三人の子供と楽しんで食事をしている姿などは、薄汚れた腑抜け親父以外の何ものでもない。

休日には、飼っている犬まで連れて、みつともない服を全員が着て、近くの山や海へ繰り出した。休日が続くと、車にテントや炭や生米や釣り竿まで詰め込んで出掛け、何日かすると全員ヨレヨレになつて帰つてきた。

「バアちゃんも行こうよ」と皆は口々に言ったが、「アホくさ」とカツはにべもなくはねつけ、峰子や薫夫婦は華やかに暮らしているのに、と冷や

しいってわけでもないんです。私はどつちかつて言うのと、忙しく立ち働いて、大きく稼いで派手に使うという生活より、ゆつたりした時間の中で、自然に溶け込むように、質素に生きるのが好きですから」と文恵は言った。

「貧乏臭いそんな生活のどこが楽しい。そんなのは主義主張でも何でもない、力の無い人間の負け惜しみだ。この世は金だ、金と権力を持った人間の樂園なんだ」と思い、その樂園に、文恵はともかく信吾は入りたいと切に願うカツは、「お金は必要なだけあればそれでいい。幸せになるための必需品ではないもの」という文恵がどうにも気にいらぬ。

やかな視線を投げ付けた。

「ヨーロッパのお土産、峰子から。今年も家族で行ったらしいわ。あそこは夫婦共よく働くから景気がいいわ」と当てつけがましく言つても、「ウー、スゴイ」と子供のように文恵は素直に喜ぶだけだ。

「人生をどう生きるかということは、即ち、お金とどう係わつていくかということだよ。豊かな人生を望むなら、ともかく、稼がなきゃ。お金がなけりや、この世は話にならないのだから。共稼ぎすりや、お前達だつて海外旅行ぐらいできるぞ。稼ぐに追いつく貧乏なしてね」とカツが言うのと、「お義姉さんとはすごいなと思うけど、羨ま

「向上心のないやる気のない人間は、平和で苦労がなくていいね」とカツは嫌味を投げ付けた。

「正月に食べてる餅で喉詰まらせて、それつきり寝たきりだなんて、カツつあんもついてないね」隣のヒデはんの声だ。掃き出し窓を開けて廊下に座わっているようだ。いつの間に来ていたんだろう、全然気付かなかつた。私はしつかり起きているつもりなのだが、どうやらちよくちよく眠っているようだ。などと思つていたら、今日は退院した日の翌日ではなく、二人の話から五日も過ぎていたことが分かつた。これじゃ、ちよくちよく眠っているどころか、ほとんど眠つていて、起

きている時がちよくちよくとしか思えない。

「それにしても何かい、私は脳溢血や心臓病
じゃなくなつて、好きな餅食つててこんな身体にな
つたつてか？」餅を口にくわえたまま、目を白黒
させながら無様にのた打っている自分の姿がカ
ツの脛の裏に浮かんできた。

「ケツ、様は無いね。年は取りたかないもんだ」
と、カツは心の中で、嘲笑しながらつぶやいて
いた。

(以上10月7日放送分)